

英 語 文 型 の 分 類

半 田 一 吉

英文を述語動詞を中心とし、分析し分類して構造の型を公式で示す試みは、従来多くの文法学者によって行われて来たが、形態、機能、意味等色々の要素の何れに重点をおくかにより、又文法そのものの方式の違い等によって結果は様々であった。勿論決定的なものはなく、Fries のように、幾つかの文型を列挙して、その中にすべての文を含めることは不可能で無意味だとの態度をとる人もあり、文法書の中には文型分類については全く触れていないものも多い。文型を分類すること自体に如何なる意義ありや、を今ここで論じている余裕はない。分類の記述に多くの紙教を費さねばならないので、始めに主として参考とした幾つかの分類例を掲げておきたいと思う。

先ず学校文法などで最も普遍的に行われているのは、補語及び目的語の有無によって5種類に分ける方法である。即ち、S+V (完全自動詞)、S+V+C (不完全自動詞)、S+V+O (完全他動詞)、S+V+O+O (全、与格動詞)、S+V+O+C (不完全他動詞) の5型である。併しながらすべての文をこの5型で律することは不可能であるし、後程実際に分類するに当たって幾つか遭遇するように、OとかCとか云うのが実際問題として至って曖昧模糊としている。併し文の性格を簡単明瞭に示すには便利な長所もあるので、これを分類の中に活用することが出来るであろう。

次に Nida の一覧表であるが、彼は先ず大文型と小文型とに分け、前者を更に単一節と複式節に分け、単一節の枠を更に次のように分け進んでゆく。

1. 独立外心的型

- (1) 主要部としての節
 - (A) 行為者行為の節

- (a) 独立他動詞節
- (b) 独立自動詞節
- (c) 独立等位叙述節

(B) 目的行為節 (略)

(2) 節にかかる修飾部 (略)

2. 従属外心的節 (略)

これを更に主部及び述部の構成要素に分けてゆく。これは単、重、複文や態の区別に及ぶものであるが、複文、疑問文、否定文などという区別も勿論広い意味で文型に違いない。今これから行わんとする分類は、複文、重文は夫々の節に分けて、否定は肯定に、疑問文は平叙文に還元して考えるものであるから、上の表中の(a)(b)(c)が文型分類に関係するものである。即ち(a)は S+V+O (+O 又は C)、(b)は S+V、(c)は S+V+C である。(a)の主部と述部の表現を夫々分析し、例えば述部を主要部と3種の修飾部に分け、前者を動詞が単一の場合と複式の場合に、後者の第1修飾部として間接目的語、与格、2重対格、第2修飾部に直接目的語と副詞 (He said so. 等)、第3修飾部に前置詞句、副詞、副詞的目的、その他を挙げている。これらを組合わせてゆくと可成り詳しい分類が出来る。

文型を出来るだけ少い範疇に分けてすっきりさせているのは Whitehall で、3種に簡略化している。彼は目的語も補語の中にも含むのである。

- (1) S+V
- (2) S+V+C
- (3) S+V+内側補語+外側補語

(1)は問題ないが、(2)の中には最初に提示した分類の S+V+C と S+V+O の両者を含み、(3)には残りの二つを含む。(3)の内側補語は与格動詞の間接目的や不完全他動詞の目的語で、外側補語は直

接目的と目的補語である。あらゆる実用的な目的にはこの分析で十分であろうと Whitehall は云っている。これは形態を主とした分類であるが、Father sent Mary money. と、Tom painted the fence white. とを同じ扱いをして下位区分も行わないのでは、Father sent money to Mary. の構文が前者には出来て後者には適用出来ない等の事情も充分説明出来ないのも、もっと詳しい分類が必要となる。

彼と対照的に、考え得る凡ゆる文型を細かに列挙したのが Hornby の動詞型の分類で、25の型に分け、69の下位区分をしている。本稿を草するに当って最も参考にしたのはこれである故に、一応ここに25の型だけ列挙しておきたいと思う。(VP は verb pattern の略)

- VP-1 V+simple direct object
- VP-2 V+(not+) to-infinitive, etc.
- VP-3 V+(pro) noun+(not+) to-infinitive, etc.
- VP-4 V+(pro)noun+(not+) (to be+) predicative.
- VP-5 V+(pro)noun+bare infinitive, etc.
- VP-6 V+(pro)noun+present-participle, etc.
- VP-7 V+(pro)noun+adjective.
- VP-8 V+(pro)noun+noun
- VP-9 V+(pro)noun+past-participle
- VP-10 V+(pro)noun+adverbial
- VP-11 V+that-clause
- VP-12 V+(pro)noun+that-clause
- VP-13 V+conjunctive+to-infinitive, etc.
- VP-14 V+(pro)noun+conjunctive+to-infinitive, etc.
- VP-15 V+conjunctive+clause
- VP-16 V+(pro)noun+conjunctive+clause
- VP-17 V+gerund, etc.
- VP-18 V+direct object+prep.+prepositional object
- VP-19 V+indirect object+direct object

VP-20 V+(for+)adverbial complement of distance, time, etc,

VP-21 V alone

VP-22 V+predicative

VP-23 V+adverbial adjunct

VP-24 V+prep.+prepositional object

VP-25 V+to-infinitive (of purpose, etc.)

以上を土台にして、69よりは簡略に、25よりは詳しく分類を試みたいと思う。

分類に当っては、Jespersen や Fries のように新しい文法概念をもちこむことを避けて、一応従来の文法用語によることとし、形態と語順を重んずるが機能や意味も無視せず、品詞別に特に重点を置いてみた。且つこれを羅列するだけでなく、出来るだけ系統的にまとめるために、次の4グループに振り分けてみた。

I Actor-Action Type

II Equational Type

III Actor-Action-Goal Type

IV Goal-Action Type

Iは所謂 S+V 型で8種類に分けてみた。IIは S+V+C 型で、所謂 nominal predicate を有する文である。Cを品詞別を主として8種類に分けてみた。IIIはI, II程単純には行かないので、4種に中間区分し、S+V+O を〔1〕、S+V+O+O を〔2〕、S+V+O+C を〔3〕とし、更に S+V+O に前置詞句のつくものを〔4〕として、それらを28に下位区分した。〔1〕は直接目的だけを有する文、〔2〕は目的補語及びこれに類するものを有する文で、OとCの間に nexus 関係のあるもの。〔3〕は二つの目的語を有する場合。〔4〕は意味的には〔2〕と同じ、形態的には〔1〕に修飾語句がついたもので、その特殊性をみとめて別類にしたのである。

IVは受動態の型で、受動態は普通は能動態に直した時の型に属させたり、be+pp を一つの動詞並に扱ってそのまま型にはめ、特に別の型を造ることをしないようであるが、何となく曖昧な点が多いように思われるので、ここでは別に分類してみたのである。

又 Nida の云う小文型については、略され或

いは了解されている部分を補って、完全な文に復元した上で夫々の型にはめる立場を取り、分類の対象としてはここでは触れないことにする。

Hornby の分類との関係を示すために、各項目の公式の後に () 内に同氏の分類表の番号を示し、同氏から借用した例文には(H)の記号をつけてある。尚公式に用いた記号は次の通りである。

- × 主語—動詞の nexus 関係
- + その他の並列関係
- [] 句、節等の連続関係
- 形式主語、形式目的の後の論理主語、目的
- () 省略可能な場合があることを示す

I. Actor-Action Type

(1) S×V (VP-21, No. 44)

Heaven forbid! Jesus wept.
The sun rises (in the east.)
It is raining. Who did?
The wicked flee when no man pursueth. (Proverbs)

完全自動詞の場合で、上例の in the east は、それがあってもなくても The sun rises. の意味には変りはなく、単に方向を示す副詞句であるから、分類に関係のない修飾語句である。

(2) There+V×S (VP-21, No. 45, VP-23B No. 59)

- (a) There is a vase (on the table.)
And there were in the same country shepherds abiding in the field ... (St. Luke)
- (b) There lived once a great king.
There entered a strange-looking little man. (H)
- (c) Here is your ticket!
Where is he?
There are the rest of the party.

(a)の場合は所謂 preparatory there である。動詞は be 動詞が圧倒的に多いが、(b)の場合のように他の動詞も用いられる。この there は特殊な語順を導き出すし、頻度も極めて多いので1項を設ける必要があると思う。(c)の例では there の性質は全く違っており、「そこに」という意味の副

詞であるから、これは本当は There she goes! などと同様、(4)に属すべきものであるが、語順が全く同じであるので、形態を重んじてここに分類したのである。この使い方では、here や where が there の代りに用いられても同じである。(a)(b)と(c)では there の発音も異なる。

(3) It×V+[(conjunctive)+clause] (VP-21, No. 46)

It seems (that) he was rich.
It does not matter (to me) which side may win or lose.
It (so) happened that I was out of London at the time. (H)

it は preparatory it で、clause は that clause が多く、その際 that は略されることもある。この that clause は歴史的には本当は副詞的なもので、主語は非人称 it だと云われるが、ここでは予備の it として分類した。

It don't seem as though we've improved matters. (Doyle) と元来は同じ型の文だと思われるが、ここでは形態に従って両者を分けて考えることにした。

(4) S×V+adverb (VP-11, No. 26, VP-23, Nos. 57, 59)

- (a) He ran away. Come in. (H)
He put up (at a hotel.)
They go upstairs.
Some of his pupils peeped in (at the door.) They sailed back home.
A boy behind him got up (on the bench.)
- (b) I think so. So I see. (H)

(4)(5)(6)は S+V 型なのか、S+V+C 型なのか論議のあるところだが、equational と云うには相応しないので前者に入れるが、この adv., ~ing, noun, adj. 等は、主格補語扱いはされるものと、副詞的補語とされるものがある。副詞は後者である。動詞とは密接な関係にあって、1種の動詞句を作るものもある。run away は「にげる」という意味になって、run だけの場合と意味が変り、run fast のように、単に fast の意味を

run に並行してつけ加えるだけに止まらない。この両者の区別は必ずしも明瞭でないので自動詞に副詞が続くものは一応ここに入れることとする。They walk side by side. 等も副詞に準じてここに入れる。Off comes the arm. のような文はこの変形したものである。(b)は so が that clause の代りをつとめるものとして、Hornby が VP-11C, No. 26 に入れているものであるが、ここでは形式通りに副詞の分類に入れておく。動詞によっては so が常に前に出る。

(5) S×V+noun or adj.
(VP-23A, No. 57)

- (a) He died a bachelor. He died a victim. He lived a saint.
(b) He died young. She died rich.

Hornby によれば、名詞の場合は adverbial complement で(4)と同じ VP-23A, No. 57 であるのに対して、形容詞の時は II(2)と同じ VP-22D, No. 56 である。同じ No. 56 中の The leaves are turning brown. や He is growing old. が、どちらかと云えば補語の方に重点があるのに比して ~ing や副詞の場合は動詞の方に重点があるように思われる。又 He died a bachelor. と He died young. では、a bachelor と young は文中の働きは全く同じである。両者とも書き改めれば、He was a bachelor when he died. He was young when he died. となるからである。これらの補語は S と等式的な関係にあるよりは、附帯状況を示すものであるから I の中に入れたいと思う。

live high や live rough 等は寧ろ high や rough が副詞化したものである。

(6) S×V+present participle (VP-22D, No. 56)

- He came running.
The city lies sleeping. (H)
We rowed back singing and laughing.
They burst out laughing.

現在分詞が自動詞の後に来て、多くは「～しながら」の意味になり、附帯状況を示す補語とも云

われ、或いは分詞構文に近いものとされる。Hornby は現在分詞だけ特別なものとせず主格補語の中に一括している。

(7) S×V+adverbial adjunct (VP-20, No. 43)

- (a) I walked (for) three miles.
You must wait (for) two hours.
He lived almost all his life in that part of England.
It will last (the owner) a lifetime. (H)
(b) It will take (you) three hours.
It weighs two kilograms.
It cost (me) a thousand dollars.

(a)は所謂副詞的目的で期間、距離等を表わし、前置詞が入ることもある。(b)は普通補語扱いされるもので、重さ、時間、値段等に関するもの。(a) (b)共に () で示したように目的語をとることがあり、その場合は III(9)になる。これらの中には II(1)に入れる方がよいと思われるものもある。特に (b)にその感が強い。

(8) S×V+to-infinitive
(VP-25, Nos. 64~66)

- (a) He stopped to smoke
I went to meet him.
(b) She lived to be ninety-nine.
You will come to like it.
We went in a hurry, only to find the doors not yet open.
(c) I rejoiced to hear that.
I awoke to find myself poorer than a beggar.

この to-inf. はすべて副詞的なものである。(a)は目的や意図などを表わすもの、(b)は結果、(c)は等位節相当の意味を有するものである。尚 long や care, agree, fail 等の後の to inf. は目的語に近いものとも考えることも出来るので、ここに入るか、III(2)にするかが論議する余地があろう。

II. Equational Type

(1) S×V+(pro)noun (VP-22A, No. 47 及び VP-22D, No. 56)

- (a) He is a beggar.
Thou art the Chirst.
What is the capital of Japan?
- (b) He became a beggar.
I remain yours truly.
The attempt proved a failure.
- (c) Maggie's arms are a pretty shape.
(G. Eliot)
She is all nerves. (E. Brontë)
All was dead silence. (W. Irving)
She was patience itself.
(E. Gaskell)

Ⅲにも同じ語順のものがあるが、ここでは不完全自動詞の場合である。(a)は be 動詞の場合であって、ここでは動詞は copula と呼ばれ、殆ど意味を喪失して、主語と補語を連結するだけの役をしている。(b)は他の動詞が用いられた場合で、be のように全く意味を失うことなく、繋辞的に用いながら元の意味も保持している。He died a beggar. となると、同じ語順でも I (5)になる。

(c)は accusative of description の例で、抽象名詞の例も含んでいる。

- (2) S×V+adjective. (VP-22B, No. 54
及び VP-22D, No. 56)

- (a) Blessed are the poor in spirit.
(St. Matthew)
What is wrong? (H)
Who is absent? He is young.
- (b) He kept silent. It smells good.
It has grown dark. I feel sad.
The wound turned out fatal.
The door swung open.
He went mad. (H)

形容詞を補語とする不完全自動詞で、(1)と同様 (a)は be 動詞、(b)は他の動詞の例である。このような場合の名詞と形容詞は機能を同じくしているから、同じ型に統一することも可能であろう。

That sound promising. や It seems interesting. 等では、promising や interesting が形容詞化したものとしてここに含める。

- (3) S×V+adj.+to-inf. or [(conj.)+

clause] (VP-22A, No. 47 及び VP-22C, No. 54)

- (a) We are ready to start.
He is able to come.
They are sure to come.
- (b) I am afraid (lest) we should be late. He was afraid that he might make mistakes. I am sure that you have already answered "yes."
- (c) It seems likely to rain.
He seemed unable to get out of the habit. (H)

(a)は be 動詞と to-inf., (b)は be 動詞と clause, (c)は be 以外の動詞の例である。(c)の第1の例では it は予備の it ではなく非人称 it であるから、(8)とは区別されねばならない。

- (4) S×V+adverb (VP-22A, No. 48)
School is over. How are you?
Is your father out?

この副詞を補語と認めない場合は修飾語となり、動詞は完全自動詞で S×V 型になるが、ここでは形容詞と同じ機能をもつものと考えて補語と認める。

- (5) S×V+to-inf. (VP-22A, No. 49,
VP-25E, No. 68, VP-25D, No. 67,
VP-22C, No. 54)
- (a) The house is to let.
To see is to believe.
My aim is to help you. (H)
- (b) He is to come tonight.
It was not to be found out.
- (c) He happened to be away.
It proved to be only the lantern.
He appeared to enjoy the concert.
(H) He seems (to be) unable to do that. This seems to be an important point.
She seems about to faint.

これも動詞の性質によって、I と II と III に分れる。ここでは不完全自動詞で、(a)は be 動詞の補語に to-inf. がる例、(b)は be to-inf. で数種の

意味をもつ慣用例, (c)は be 以外の動詞の例だが, I (8)に比べるとやはり述語動詞よりも不定詞の方が重要な意味をもつ。

尚 Hornby が VP-25, No. 69 にまとめている be going to はこの言葉だけしかないので, 寧ろ助動詞的なものと見たい。

- (6) S×V+prepositional phrase
(VP-22, No. 48)
It is of no use.
The secret of the Lord is with them that fear him. (Psalm)
The door of the temple was of ivory inlaid with precious stones.
Broken glass does not seem of much value. He is in the garden.

動詞は be が大部分で, 前置詞+句が補語になっている。I walk in the garden. のような副詞句は I (1)で, これとは全く別である。

- (7) S×V+[conjunctive+clause]
(VP-22, A, No. 47, VP-23A, No. 57)
(a) This is where I work. (H)
Everything is as it should be. (H)
The fact is that I don't like him.
The chances are that the wind will fail us. That's because it's empty.
(b) He looks as though he had seen a ghost. (H) It looks as if we should have a storm.
The story goes that he was blind.
It seemed as if they were lost.

接続詞, 疑問詞の導く節が補語になっているもので, (6)に比べると be 以外の動詞の用いられる場合は多いようである。Hornby によれば, be 動詞の時は主格補語で VP-22 であり, 他の動詞の時は副詞的補語で VP-23 になる。

- (8) It×V+C-S (VP-22B, Nos. 50~53, VP-22C, No. 55)
(a) It is easy (for me) to do that.
It would be a mistake to ignore his advice. (H)
(b) It is no use crying over spilt milk.

- It's no good your talking like that.
(c) It is natural that he should say so. It's doubtful whether he will be able to come. (H) It is a pity (that) you couldn't come. (H)
Is it so sure a thing that this silver was ours?
(d) It appears unlikely that we shall arrive in time. (H)
It seems good (to me) to do so.
(e) There seems (to be) no need to go now.

予備の it が形式主語となり, 句や節が S となって最後に来たもので, C は名詞, 形容詞, 句などであるが, S の内容によって(a)から(e)まで下位区分した。即ち(a)は to-infinitive, (b)は gerund, (c)は clause の場合で動詞は何れも be であるが, (d)は他の動詞の場合, (e)は It の代りに There が予備の位置を占める。(e)は可成り内容が違うが別項を設ける程は頻度がないのでここに含めた。又強調構文であるところの,

It is I who am to blame.

に於ては, it は環境の it で, who 以下は関係詞節で it を論理上の先行詞とする。結局 S×V+C 型でも, S にひっかかるので(8)とは別にしなければならぬという論議もあるうが, 歴史的な類似性と形態上の類似性からこの中に入れておいてもよいのではないかと思う。

III Actor-Action-Goal Type

[1] S×V+O の型

- (1) S×V+(pro)noun (VP-1)
(a) Columbus discovered America.
(In the beginning) God created the heaven and the earth.
We must help the poor.
(b) He dreamed a happy dream.
He died a dog's death.
(c) Please describe carefully what you saw. (H)

他動詞が直接目的だけを取る型の中で最も代表的なものである。少数の動詞を除いては受動態を

作ることが出来る。又普通は自動詞として用いられる動詞でも、同族目的を伴う時はここに入る。又(c)のように what で導かれる関係詞節は、(pro) noun には当てはまらないかも知れないが、関係代名詞を中心として出来ているので、Hornby もそうしているように、ここに入れておきたいと思う。同じ what で導かれる名詞節でも、Do you know what this is? のように、what が疑問詞の時は(6)に属することになる。又(a)の最後の例の the poor のように、形容詞に the がついたものは、名詞に準じてここに入れる。

- (2) S×V+to-infinitive (VP-2, No. 2)
I want to see him. She tried to help them. He decided not to go. They refused to come. It began to rain.

Ⅱ(4)と同じ語順だが、Vが他動詞で to-inf. がその目的になる場合である。Hornby が No. 3 に分類している I shall have to go. のような文は、have+to が must と同義であるので、be going to と同じく助動詞と同等に扱いたいと思う。

- (3) S×V+gerund (VP-17, Nos. 32~34)
(a) It stopped raining.
I remember seeing him.
Would you mind doing me a favor?
(b) I like swimming.
It began raining.
(c) My shoes want mending. (H)
Your work needs correcting. (H)

(a)は gerund を to-inf. に書き変えることが出来ない。(b)は I like to swim. の如く(2)の形に書き直しても意味は同じである。(c)は gerund が受身の意味をもつ場合で、mending=to be mended となる。

- (4) S×V+[(that)+clause]
(VP-11A, No. 24, VP-24B, No. 62)
(a) He said (that) he was tired.
I suppose (that) he won't come.
(b) I agree that it was a mistake. (H)
The servant insists that she will go.

(a)と(b)とは実は 可成り 性格の 違うものであ

て、形態上の類似だけで一つにまとめたものである。(a)は名詞節が他動詞の目的になっている文の中で、that に導かれるもので、接続詞を略し得る点で(6)と異なる。(b)は性質上はむしろ(8)に近いものである。即ち V+preposition の後に that clause が続く場合に前置詞が略されて、一見(a)と同じ構文になるものである。(又動詞の次に with you などが入ると (27) と同じになる。)併し it was generally agreed that... のような構文も出来る点では(a)とよく似ているし、that を通常略さない点を除いては實際上(a)と変りないので、(4)の亜流として(b)にしたものである。

- (5) S×V+[conjunctive+to-inf.]
(VP-13, No. 28)
I know how to do it.
He did not know what to do.

名詞句が目的語になった場合で、次の(6)とは、大概どちらにでも書き変えることが容易である。

- (6) S×V+[conjunctive+(clause)]
(VP-15, No. 30)
I wonder who it was.
Do you know what this is?
Please say where you want to go.
(H)
(It fell to earth,) I know not where.
(Long fellow)

この最後の例は where が単独で目的語になっているが、これは where it fell という節を省略したものとも、暗示するものとも考えられるが、現実の形態では where だけしかないのだから、S×V+adv. という項目をⅢの中に作るべきかもしれない。

- (7) S×V+quotation (VP-1)
He said "No."
And Simon Peter answered and said,
Thou art the Christ, the Son of God.
(St. Matthew)

これは(1)と同じ項目にまとめてもよいのだが、極めて頻度が大きいのと、"Very well," said Swift. の如く屢々転置されたり、"O-jochū," he exclaimed, "do not cry like that." のように独

特の語順をよく取る点で、(1)とは別に1項を設ける方がよいと思う。

(8) S×〔V+(adv. or noun)+preposition〕
+object (VP-24A, No. 60, VP-24B,
Nos. 62~63)

(a) Look at the sky. You can rely upon that man. (H) My sister belongs to the chorus group.

(b) I cannot put up with him. Brush up on your English.

(c) Everything depends on whether you pass examination. (H) He will decide (upon) when we shall start.

(d) He speaks ill of her. We must take good care of the house. By and by nature will make some use of our refuse.

(e) I will see (to it) that everything is ready in time. (H) You may depend upon it that every member of the Committee will support your proposal. (H)

group verb 又は phrasal verb と呼ばれ、動詞と前置詞で一つの他動詞のような働きをする。或いは (prep.+object) が動詞の目的語と解することが出来る。これは speak ill of のように、名詞が間に入る時は一層その感が強く、(noun+prep.+object) が目的語になっていると云える。併し受動態を作る時など、事実上 S×V+O と考える方が便利である。即ち look at=watch, think of=consider と考えることが出来る。He sleeps in this room. は sleep と in を結合して受動態を作ることはしないが、He laughed at me. は I was laughed at by him. とすることが出来る。

(a)は前置詞の後に(代)名詞が来る場合、(b)は前置詞の前に副詞が来る例。(c)は節が前置詞の目的語になった例で、decide upon, worry about, agree about などがあり、upon が略されて(6)(4)の形式になることもある。I don't care where you go. を Hornby がこの類の中に入れてい

のも、前置詞が略されているからである。(d)は名詞が中にはさまったもので(a)(b)(c)とは本来別のものであるが、文中の機能が共通点が多いのでここに入れた。Hornby の分類中にはこの型はない。(e)は S×V+(prep.+it)+〔that+clause〕の形式になり、prep.+it が略される時には(4)の形になる。to it がある時には特殊な形なので、1項設けることも考えたが、あまりに頻度が小なので、この中に含めることにした。object が節の時は必ず予備の it を主語にする。(4)の(b)が元来はここに属すべきものであったことは既述の通りである。

(9) S×V+O+adverbial
(VP-10, Nos. 22, 23)

(a) I took my brother to the zoo.
I put the hat on the desk.
He turned all men into swine.
He looked me in the face.
He shook me by the hand.
Paris filled him with dismay.
Beowulf catches the monster by the arm.

(b) I bought this book to read during the vacation.
We make our shoes to last. (=so that they will last) (H)

(c) We found the books where we had left them. (H)
He treats me as if I were his wife.

(a)では副詞句が文の述部に大きな意味上の比重をもっている。(b)では to-inf., (c)では副詞節が adverbial である。Oは(代)名詞が殆どである。

(10) It×V+O-S (VP-1)

It never struck me that you might need help. (H)

Hornby は VP-1 の註の中にこの形を参考にあげているだけであるが、ここでは予備の it は原則として別に分類する建前から1項を設けた。Sになり得るのは infinitive phrase, for+(pro)noun+to-inf., clause である。

〔2〕 S×V+O+C の型

(11) S×V+(pro)noun+noun

(VP-8, No. 16)

They elected Kennedy president.

He makes us better boys.

They call him uncle John.

名詞が目的補語になる場合で, Hornby はこれを predicative adjunct と呼ぶ。

(12) S×V+(pro)noun+adjective

(VP-7, Nos. 14~15)

(a) Can you push the door open? (H)

His deeds will render him famous.

Thou canst not make one hair white or black. (St. Matthew)

(b) They found him dead. I wish you well. He likes his coffee strong.

(H) In an oak I found the arrow,

still unbroke. (Longfellow)

(a)は補語たる形容詞が動詞の動作の結果なる状態を示す場合で, push した結果が The door is open. の状態になることを示すのであるが, (b)は He was dead. の状態に既にあるものを見出したという関係になる。

(13) S×V+(pro)noun+(to be)+C

(VP-4, No. 6)

Most people supposed him (to be) innocent. (H)

I consider him (to be) wise.

I belived him (to be) dead.

I think her to have been beautiful.

以上のほかに, prove, find, report 等の動詞がこの型を造るが, to be は to have been の時以外は屢々略されて(12)になる。guess, declare, judge 等では to be は略されない。

(14) S×V+O+adverb 又は S×V+

adverb+O (VP-10A, Nos. 20~22)

(a) Put your hat on. (H)

Please take him upstairs.

Take me up and cast me forth into the sea. (Jonah)

The giant shut them up in a cave.

(b) Put on your other hat. (H)

...and cast forth the wares that were in the ship into the sea. So they took up Jonah, (and cast him forth into the sea.) (Jonah) I took off my overcoat.

A man called Homer gathered together these hero tales.

The monster takes away the arm.

You light up your candles for me.

He made up his mind.

副詞がOの後に来ても前に来ても意味に变りはないが, Oが長い時には前に置かれる。(b)の場合には V+adv. は〔1〕(7)の V+prep. と似たものになる。

(15) S×V+(pro)noun+to-inf.

(VP-3, Nos. 4~5)

(a) I want him to go. He asked me

to do so. I don't ask you to give

me your promise. I wish my days

to be found each by natural piety.

He caused a feast to be prepared.

I know him to be a gentleman.

(b) I don't want there to be any

trouble. (H)

所謂 accusative with infinitive で, 次の(16)と同じ group にしてもよいが, 一応 to-inf. と bare inf. で分けおのが妥当と思う。

(b)はこれの1変種で, there の介在によって特異な語順になっている。頻度が小なので1項を設けるまでもあるまい。

(16) S×V+(pro)noun+bare inf.

(VP-5, Nos. 8~10)

(a) I heard him sing.

We felt it move.

(b) Let me go. I will make him do

it. Let there be light. (Genesis)

Bid him come in. Help me (to)

lift it. I have known educated

persons make this mistake. (H)

(c) I want to have him come.

What would you have me do? (H)

I should like to have you meet him.

使役動詞, 知覚動詞等の目的語の後に bare inf. が続くもので, help のように(15)の形をとることの出来るものもある。これも(15)同様に accusative with inf. と呼ばれる。(a)は知覚動詞, (b)は使役動詞その他, (c)は特に have の用法である。

(17) S×V+O+present participle
(VP-6, Nos. 11~13)

- (a) I saw him running.
Listen to him singing.
(b) Every night found him poring
over his books.
(I'm sorry) I've kept you waiting.
Who set the bell ringing?
(c) I can't have you doing that. (H)
We shall soon have the mist rising.
(H)

所謂 accusative with participle の中で現在分詞を用いたもの。(a)は知覚動詞, (b)はそれ以外の動詞, (c)は have の場合である。

(18) S×V+(pro)noun+past participle
(VP-9, Nos. 17~19)

- (a) I had my purse stolen. I have
never heard his name mentioned.
They had their heads cut off.
(b) I got my hair cut. What would
you like done? He could not make
his voice heard. (H)

これも accusative with participle で, 過去分詞を用いた場合である。(a)は主語の意志に関係なく何かを~される場合。(b)は主語の意志によって何かを~させる場合。これらは何れも結果的に My purse was stolen. His voice was heard. 等の意味を内包している。(15)(16)(17)が目的語と補語との間に能動の nexus 関係があるのに対して, (18)は受身の nexus 関係にあるのが特色である。

(19) S×[V+preposition]+(pro)noun+
to-infinitive (VP-24A, No. 61)
I rely upon you to be discreet. (H)
We are waiting for you to begin.

(8)と(19)を組合わせた云ひ方で, V+prep. を一

つその他動詞と考えれば accusative with inf. の 1種である。

(20) S×V+it+C-O (VP-4, No. 7)

I think it a pity (that) you didn't
try harder. (H)

I find it impossible to visit you on
Sunday.

形式目的 it を用いた例で, Oは that clause, infinitive, phrase, for+(pro)noun+to-inf. その他名詞句等。Cは形容詞, 名詞及び名詞を中心とした語群。

[3] S×V+O+O の型

(21) S×V+(pro)noun+(pro)noun
(VP-19, Nos. 40~42)

- (a) He gave me a book
He told us an interesting story.
(b) Will you buy me some? (H)
My father has left me nothing.
(c) She will make him a good wife.
May I ask you a question?

(a)は間接目的を to~ という phrase に書き直せる場合で, (b)は for~ に書き直すことの出来る場合である。(c)はその何れでもない場合で, 上の例の him は dative of interest とも解され, 下の例では you は of you にすることが出来る。上例はよく問題になる文であるが, I will make you a new suit. や I will make him a merchant. の何れとも make の意味は異なる。併し語の文法関係は前者に近く, a new suit が make の目的語としての性格が明瞭であるのに対して, a good wife はどちらか云えば make の補語の感が強い。ここではやはり make を与格動詞の如くに扱って, a good wife を目的語としておきたい。

(22) S×V+(pro)noun+to-infinitive
(VP-3, No. 4)

I promised him to go there.

これは Hornby の分類では VP-3 に入るが, I do not want anyone to know. とこの文とでは, 前者が目的語と to-inf. との間に nexus 関係があるのに対して, 後者にはそれが無いから同

一視すべきでないという疑問が指摘されている。(新英文法辞典) 後者の to-inf. (上例の to go there) は動詞 (promised) の目的語の性格をもっているから、S×V+O+O の中に分類すればよいと思う。

- (23) S×V+(pro)noun+[that+clause]
(VP-12, No. 17)
He told me that he knew it.
We satisfied ourselves that all the doors and windows were secure. (H)
- (24) S×V+(pro)noun+[conjunctive+to-inf.] (VP-14, No. 29)
He showed me how to use it.
I will tell you what to do.
- (25) S×V+(pro)noun+[conjunctive+clause] (VP-16, No. 31)
Tell me what this is. (H)
Ask him when he will come.

(23)(24)(25)は何れも(4)(5)(6)に夫々間接目的を加えた形である。

[4] S×V+O+[preposition+object]の型

- (26) S×V+O+[preposition+(pro)n.]
又は S×V+[prep.+(pro)noun]+O
(VP-18, Nos. 35~38)

- (a) Please give this to somebody.
We left everything to the establishment committee. And they went and told it unto the residue. (St. Mark) He read the letter to all his friends. (H)
- (b) He bought a dictionary for me.
(H) I made a coat for him.
- (c) She reminds me of her mother.
Thank you for your kindness.
We can compare his eloquence to a fast-flowing river.
- (d) I explained to him the impossibility of granting his request. (H)

Oは[1]の所で列挙した種々の目的語である。(a)(b)は共に S×V+O+O の間接目的が前置詞句に書き改められたもので、(a)では to、(b)では for

が前置詞になる。間接目的が代名詞で、直接目的が長い名詞語群なら(26)の形式が用いられる。(c)は S×V+O+O の形では云うことが出来ない。(d)は前置詞句が動詞の直後に来た例である。

- (27) S×V+[preposition+(pro)noun]+clause etc. (VP-11B, No. 25)
I suggested to him that he should adopt a different policy.
Then Jesus answered and said unto her, O woman, great is thy faith.
(St. Matthew)

他に admit, confess, explain 等の動詞にこの型が生ずる。Hornby は(4)と同じ動詞型に分類している。

- (28) S×V+it+[preposition+(pro)noun]-O (VP-18C, No. 39)
We owe it to society to help in the apprehension of criminals. (H)

We owe it to our climate that we are a healthy nation.

He took it for granted that everybody who lived in the country was either stupid or miserable.

(28)の変形だが頻度は可成り大きい。

IV Goal-Action Type

- (1) S×be·pp
He was surprised.
You will be disappointed.
English is spoken (in this country.)
It was made (by him.)
The Lord be thanked!
They were married.
- (2) S×be·pp+[preposition+object]
Wordsworth is known as the greatest nature poet in English literature.
It was poetically compared to the moon.
Then shall the kingdom of heaven be likened unto ten virgins (St. Matthew)
He is regarded as a friend.

(1)と(2)とは S×V+O の裏であって、区別する必要もない位である。併し上にあげた(2)の例などは、by～ などと違って、これなしには意味をなさないものであるから、別項を設けることも決して無意味ではない。

(3) S×bb·pp+(pro)noun or adjective

(a) She was appointed professor of the Sorbonne. You are considered a grown up. He was elected chairman. It will be made clear.

He was made angry.

(b) We are taught English by him.

I was shown a specimen.

(c) He was born rich.

100 are presumed dead and 600 seriously wounded. (新英文法辞典)

(a)は S×V+O+C の裏で、(b)は S×V+O+O の裏である。従って(a)の第1例の professor は補語であるのに対して、(b)の第1例の English は Retained object である。(c)は I の(5)と同じ性質のもので附帯状況を表わす補語である。

(4) S×be·pp+adverb

You are let off.

It was picked up in the street.

He was cut off from all other human life.

I was let out four days ago.

Ⅲ(14)の裏である。

(5) S×be·pp+participle

(a) The church bells were heard echoing at twilight.

He was found working at his desk.

(b) 25 are reported killed. (新英文法辞典)

(a)は Ⅲ(17), (b)は Ⅲ(18)の夫々裏の文型である。

(6) S×be·pp+to-infinitive

(a) In this way we are expected to establish right habits. He was

advised to give up smoking.

(b) He was made to do it. He was seen to go out of the room.

(a)は Ⅲ(15), (b)は Ⅲ(16)の裏である。

(7) It×be·pp—S

...It was said of some, that John was risen from the dead. (St. Luke)

It can be easily shown that he is honest.

主語が that clause や to-inf. である場合に、予備の it を用いたものを一切ここに包含する。

Ⅳの最後に、He became known. や He appears quite satisfied. 等は潜在的に受身の意味をもっているが、この場合の pp は形容詞と同等に処理してⅢの中に含め、Ⅳには be 動詞の受身だけを入れることにしたいと思う。

(後 記)

以上5文型と品詞を基本に、Hornby の動詞型を土台にして文型の再編を試みたのであるが、もとより見直してみると種々の欠陥も多く、今後更に練り直してゆきたいと思う。無理の第1は大きな4項目に大別したことにあるかも知れない。そこに含めることに疑問の余地あるものも幾つかある。又或る所では分類が丁寧に過ぎ、他の所では大ざっぱである感のする所もある。preparatory it や there のために1項設ける必要があるかどうかとも問題となろう。品詞にこだわらずに、OやCの機能によってまとめた方がすっきりするかも知れない。類例の収集や頻度の統計も未だ少く不完全なので、それが整った所で更に改訂を加えてゆきたいと思う。或程度無理を承知で4大別で始める方法をとったので、その長所を生かして出来るだけ完全なものに仕上げたいと念願している。尚紙数の関係で分類の一覧を省いたので、全体を見渡すのに甚だ不便である上に、序論の可成りの部分も略したので説明不足もある点お許しを乞う次第である。